



新型インフルエンザ流行を 振り返って

五味 慎太郎

昨年を振り返ると、リーマンショックに始まった100年に一度と言われている世界的不況は就職氷河期として大学生に重くのしかかっています。米国では初のアフリカ系大統領が誕生しました。またわが国においては戦後初の本格的政権交代により鳩山内閣が発足しました。一方、スポーツ界では1920年にジョージ・シスラー選手が作ったシーズン最多安打の257本を破り、2004年に262本と記録を塗り替えたイチロー選手が、昨年9月には大リーグ史上初の9年連続200安打を達成しました。今年の2月にはバンクーバーオリンピックで浅田真央選手をはじめ日本選手が活躍しました。また、本学陸上競技部は昨年に続き出場した箱根駅伝でシード権を獲得する立派な成績を残しました。

保健管理分野でも多くのことが話題になりました。ウエストの測定を必須項目としたメタボリック症候群が2008年度か

らの健診に導入され、本格的に保健指導が始まりました。いやな話題では、大学生の大麻事件が相次ぎ、本学でも学生を対象に講演会を開催し、注意を喚起しました。その後も有名芸能人の違法薬物使用や所持による逮捕は繰り返し報道されています。しかし、何と言ってもこの数年の大きな話題は感染症の猛威

でしょう。麻疹の大流行後、中学1年生・高校3年生に対して2回目の予防接種が行われ、一段落したと思っていたら、H5N1強毒性鳥インフルエンザ対策を迫られました。まさにその最中に、ブタ由来のH1N1インフルエンザが猛威を振るい、現在に至っています。夜中の突然の厚生労働大臣の記者会見に始まり、空港で物々しい装備で検疫を行う水際対策の様子が盛んに報道され、不安を募りました。ほとんどの人がマスクを着けている通勤風景がテレビに流れ、マスクが売り切れました。

その後、一医師の精密検査要請により国内第1例が報告されたのを契機に、2009年5月、関西方面で最初の新型インフルエンザ流行が確認され、早期に学校閉鎖などの対策がとられました。感染者が通っている学校関係者がマスコミに極悪人のように糾弾されていた姿は記憶に新しいところでしょう。

その後、流行は全国に広がることなく収束したかのように思われましたが、8月には、スポーツ大会などを通して多くの地域で感染が広がり、全国規模の大流行となりました。本学でも夏期休暇期間中に全学生数の約0.5%にあたる101名の感染が報告されました。このうち74名は、体育会やサークル等の団体に属する学生で、合宿、強化練習や学生選手権大会での濃厚接触が原因で集団感染したと考えられました。とくに8月は毎日のように感染の報告が続き、合宿の早期解散・活動の一時停止等の指示、情況報告・注意喚起のためのホームページ更新、後期授業開始後の対応の確認などに追われました。ほぼ同時期

に、発熱外来廃止や新型コロナウイルス確認検査原則中止など政府の対策が大きく変更され、現場の混乱は避けられませんでした。

その後、大学キャンパスの所在する東京都および神奈川県ではインフルエンザ流行注意報が発令され、10月には報告者数が流行警戒レベルに達し、本学でも報告数が10月332名、11月319名に上りました。しかし、12月になると徐々に減少し、1月に東京都・神奈川県の影響報告者数が流行警戒レベルを下回ると、1月85名、2月4名と激減しました。最終的に2009年4月から2010年3月のインフルエンザ発症報告件数は学生1,077名(学生数の約5.3%)、教職員26名でした。今回流行した新型コロナウイルス(A型H1N1亜型)は、持病のある人や若年者の一部に重症例や死亡例がみられましたが、本学では幸い重症例はありませんでした。

新型コロナウイルスは現在も季節性に流行を繰り返している同じH1N1亜型のソ連かぜとは抗原性が異なり、1918年から流行し人類が最初に遭遇したインフルエンザのパンデミックであるスペインかぜと類似していると言われています。スペインかぜは、感染者は6億人、死者は5,000万人に及び、当時の世界人口は18億人であったと言われているため、全人類の約3割が感染したことになります。日本では当時の人口5,500万人に対し39万人が死亡しました。ちょうどはじめにふれたジョージ・シスラー選手がイチロー選手の前にシーズン最多安打記録を作ったことです。おそらく当時のウイルスがブタの体内でほとんど突然変異を起こさないまま現在に至り、最近になって人に感染する性質を獲得したと推測されています。このため高齢の方は新型に対しても免疫があると言われるています。今回の流行は一応終結しましたが、パンデミックは第1波より第2・第3波の流行の方が大規模になることがあります。

感染者が若年層に集中していることを考えると、大学としては今後とも厳重な監視体制が必要です。

さらに強毒性のH5N1亜型鳥インフルエンザがいつ本格的流行を起こすか分かりません。鳥インフルエンザは死亡率が10から15%とも言われています。高頻度に肺炎・脳症・多臓器不全などを起こし、原則的に上気道に症状が局限する季節性や今回の新型インフルエンザとは全く違う疾患と考えた方が良いという専門家が多数を占めています。

懸念されるのは、今回の新型インフルエンザは大騒ぎした割には毒性が低く、鳥インフルエンザで想定されていた程の脅威ではなかったという経験が、今後の対策に悪影響を及ぼすことです。学内での危機管理の面から振り返ると、鳥インフルエンザ対策では最悪のシナリオを想定する必要があることを理解していたくまでに長い時間がかかりました。危機管理のための会議を繰り返しながら、全教職員を対象に何度も講演会を開きました。やっとその恐ろしさを理解して頂いたと思っていたところに、今回の新型インフルエンザが流行しました。当初からみれば、国の対策も、個人レベルでも「大山鳴動してねずみ一匹」といった状況です。この経験が強毒性の対策を誤らせない、中途半端にしたりすることがないように努めなければならぬと思います。

1929年の大恐慌も1987年のブラックマンデーもみんな忘れてしまっていますし、あと何年か経てば今回のリーマンショックも忘れ去られてしまうでしょう。インフルエンザ対策ではこのようなことはあつてはなりません。まだまだ予想できない事態が起こるかもしれません。保健管理センターの果たす役割の重要性を改めて感じています。

(大学保健管理センター所長)